

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

令和2年度より「心理アンケート」を実施し、取組課題を各学年で検討している。当該校では、1回目の「心理アンケート」の結果を基に指導方法を検討・実践し、2回目の「心理アンケート」の結果を基に検証するという一連の流れを重視した。その結果、各学年の教員がまとめた学年・学級集団への取組と個別アプローチの取組を、学級や当該生徒に携わる全ての教員が計画的・系統的に実践している。

学年・学級集団への取組では、定期的に対人関係ゲームに取り組んだ。生徒同士が互いに関わり合う場面を意識的に設定し、楽しみながら互いを認め合うことで、個々を受け入れることができる生徒中心の魅力ある学級づくりを推進している。

右の写真は、「絵しりとりゲーム」に取り組んでいる様子で、生徒は勝ち負けよりも絵でつながることを楽しんでいた。

また、支援が必要な生徒に対するアプローチを共通理解し、生徒の自己肯定感を高めることで、不登校の未然防止に努めている。



さらに、運動会など学校行事に取り組む際には、所属する学級への所属意識を高めるための掲示物を作成している。そして、他者を受け入れる心を育む機会となるよう、生徒と共に取り組んでいる。特に、生徒の活動を他者の前で丁寧に評価することを重視するなど、相互評価を取り入れ、互いの自己存在感を高めている。

【取組2】(B中学校)

数学科の授業において、「自己決定の場の提供」を意識し、生徒が教科書や問題集、一人1台端末の活用など学習教材を選択したり、学習課題を解決するために自らの学び方を考えたりしている。また、学び合いによる学習を授業の中に取り入れることを推進している。

【取組3】(C中学校)

4月に「不登校の現状と課題」というテーマで、不登校に対する共通理解を図る研修を行った。過去5年間の不登校出現率の推移を示し、生徒にとって「学校に行く魅力とは何か」を教員同士で考え、新たな不登校生徒を生まない学級づくりを推進した。

また、校内別室には、「教室からの一時避難場所」としての役割があり、一人一人の生徒の状況に応じた過ごし方ができる環境を整えることの重要性も、教職員の間で共通理解を図っている。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

生徒支援委員会を週1回実施している。不登校生徒について、当該学年の担当教員から報告があり、SCや不登校対応巡回教員を含めたアセスメントにより支援を進めている。支援会議後には会議の内容を全教員に周知し、統一した支援を行っている。

アウトリーチによる支援（A中学校）

不登校が長期化している生徒に対して、繰り返し家庭訪問を行い、「人と関わる力」を身に付け、社会的な自立ができるように支援している。当該生徒と会うことができない場合には、同世代の様々なものの見方や考え方に触れることができるように読み物資料を届けている。

校内別室における支援（C中学校）

「教室に居づらい」、「学校に行きにくい」と感じている生徒には、他の生徒との接触を避けることができる特別な出入口を設けるなど、安心して登校できる環境づくりに努めている。学習に取り組むだけでなく、季節に応じた掲示物を作成したり、対人関係ゲーム等に取り組んだりしてコミュニケーション能力や対話力の育成を図っている。



校内別室に生徒が登校した際に、自分を褒める言葉を所定のカードに記入したり、登校シールを貼ったりして、活動の可視化を行っている。また、学級担任が校内別室を訪れ生徒と対話することができるよう調整し、自己存在感を高めようとしている。

デジタルを活用した支援（B中学校）

校内別室で一人1台端末を活用し、生徒のニーズに応じた個別学習に取り組めるようにしている。

また、校内別室の生徒に向けて授業配信を行い、オンライン上で授業者やクラスメイトとの対話することができるようにすることで、生徒の在籍学級に対する所属意識を高めている。

関係機関との連携（C中学校）

不登校が長期化している生徒に対して、SSWやSCと連携して学校とのつながりを保っている。SSWやSCとは定期的に連絡を取り合い、互いの支援状況を共有するとともに同じ方針で支援を継続している。また、教育支援センターを定期的に訪問し学級担任とのつながりを保っている。

成果

担当している3校で支援が必要な77人の生徒のうち、巡回教員が支援した生徒は39人（50.6%）となり、新たに不登校になった生徒の割合は0.71%であった。

課題

支援を受け入れない家庭も多くあり、当該生徒にとっての人間関係を築く機会をいかに増やすかが課題である。